

「視聴率に踊らされることなく、文化の主流たれ」

格

差社会、過疎化、人口減…。

地方は厳しい状況に直面している

地域放送局に

寄せられる期待と果たすべき役割は
ますます大きくなっている

「放送は文化の主流だ」

地域に根付き、地域の課題や文化を
発信することの重要性。

能登の地から文化・芸術を発信する
俳優・演出家の仲代達矢氏に聞いた。

(このインタビューは2009年に行いました)



仲代 達矢 俳優

プロフィール

1932年生まれ。戦後の日本映画界を背負ってきた名優。劇団俳優座出身で黒澤明監督『影武者』や小林正樹監督『黒い河』と日本を代表する映画作品に出演。テレビはNHK『新・平家物語』『大地の子』ほか代表作多数。現在は「無名塾」を主宰し、後進育成に尽力。紫綬褒章や文化功労賞など受賞歴多数。

能登との交流

「昨今、より地域と向き合うことがNHKに求められ、地域放送局への期待が高まるなか、石川県にゆかりが深く、大河ドラマをはじめ、数々のNHKの番組にご出演の、俳優・仲代達矢さんにインタビューを行いました。」

仲代さんは、ご自身が主宰する、若手俳優を養成するための無名塾の合宿で、能登半島の七尾市を訪れて以来、能登との交流が続けてきました。仲代さんとの縁で、市には演劇専門ホールが完成し、無名塾の全国公演は毎年、能登からスタートしています。

今年で77歳の喜寿を迎える仲代さんは、この秋に、能登限定のロングラン『マクベス』^{※1}の公演を控えています。『マクベス』の公演は、すでに全国各地からの予約が入り、キャンセル待ちの状態となっています。

いつまでも重厚な演技で多くの人の心をとらえてやまない仲代さんが、NHK、ひいてはテレビという文化についてどう考えているのか、そして、どんなことを考えて地域から発信し続けているのか、放送における視聴者との向き合い方のヒントを得るべく、インタビューを行いました。

愛する能登で演じる舞台

——今年秋に、能登で演じる舞台『マクベス』には、地元の能登のボランティアの方も大勢出演します。仲代さんの能登への思いを教えてください。

静かで、海と山があって、空気の良いところで若者に稽古させたいなあということ、20何年も前から能登半島の七尾市で合宿をしています。能登の若者たちとコミュニケーションをとって、一緒に地元のお祭りに出たりカラオケ大

会に出たり、能登に行つて交流し合つてきました。それがご縁で演劇専門ホールが作られ、我々は年一回芝居をしています。まず能登をスタートにして全国を回ります。もう15年以上経ちます。能登にはこういう文化財産があるというのを県外の人にも知ってもらいたくて、『マクベス』では約2か月のロングランを50回やります。舞台の中で、マクベスが王様を殺して自分が権力を持った時に、「バーナムの森が動かぬ限り、お前は王様でいられるぞ」という魔女の予言があるのですが、森が動くのです。それがまさに地元のボランティアの人たち、50人なり100人なりが、杖を持つて固まつて動いてくると、森が動いている感じが出ます。

我々作り手はいいものを作ろうとしていますが、演劇の街というものを作り上げる大きなきっかけになればいいなと思つています。

舞台や映画とは違つたテレビの特異性

——稽古で忙しい日々のなかで、仲代さんは、普段、テレビをご覧になる機会はあるのですか。

結構ありますよ。特に仕事の合間に観るテレビはNHKが多いですね。俳優としても役者としても、NHKの大河ドラマなり色んなものに出させてもらっていますから、特にNHKには親近感を持っています。ニュース、ドキュメンタリーその他を含めて懐深いですよ。平和や戦争の問題を含めて突っ込んで取材していますよ。

以前観たドラマでは『ハゲタカ』※²が面白かったです。専門的に言わせていただければ、あれは全部手持ちカメラですよ。主人公なり周りの人たちの心の揺れが微妙なカメラの振れで出ています。スピード感が出ますし、出ている

登場人物の心の中まで揺れているというようなドラマでしたから、最近になく面白かったです。

——仲代さんにとって、テレビはどんな存在なのでしょう。当時の制作手法はどのようなものだったのですか。

舞台を中心にテレビのないころからやっているから、その後テレビが出てきて、今はテレビが主流ですよ。しかし、たまには、劇場まで足を運んで下さい（笑）。暗くなつて開幕のベルが鳴つて幕が開いて、映画なり芝居なりを見る、こういう緊張感は、我々古い人間ばかりではなくて経験すればいいものだと思います。

——というのは、テレビを誹謗しているわけではない、テレビでご飯を食べながら観られますよね。民放はコマースナルが入るし。集中力の問題で言えば、他のニュース、ドキュメンタリー、文化問題など色々なものを含めても、特にドラマは不幸な状況にあると思います。

テレビを作っている方は、カメラも編集も、演出家も俳優も、みんな映画と同じように作っているわけです。特に編集をする時は、0点何秒で勝負しています。きつと作っている方は、お客さんがみんな集中力を持つて見ていると思つているわけですよ。

でも、テレビの宿命的な問題かもしれないけど、観ている方はご飯も食べているし、面白くなければチャンネルを変えられる。われわれ作る側からすると、ちよつと他の演劇や映画と比べるとしんどいと思います（笑）。

※1「マクベス」
シェイクスピアが書いた、スコットランドの英在の王・マクベスをモデルにした戯曲。「ハムレット」、「オセロ」、「リア王」とあわせシェイクスピアの四大悲劇と称される。魔女に「王になる」との予言を告げられたマクベスは、妻と共謀して王を暗殺し、自らも王位に就く。王位の維持のため、そして自らの不安をかき消すように悪行を積み重ねる。しかし、次第に追い詰められ、最後には暗殺した王の長男・マカムの討伐軍によって討ち取られてしまふ。

※2「ハゲタカ」
2007年2月17日から3月24日まで、毎週土曜日にNHK総合テレビとBSハイビジョンの「土曜ドラマ」で放送された「日本買収」ビジネスを巡る二人の男の野望と挫折を軸に展開されたテレビドラマ。原作は社会派ノベルを発表する元新聞記者の作家・真山仁による小説「ハゲタカ」と「ハイアウト」の2作品。国内外で高い評価を得たことから、2009年には映画化もされた。

視聴率に左右されずに良いものを作る

——役者である仲代さんからご覧になった、理想のテレビ作りとはどうあるべきですか。

視聴率に左右されず、良いと思うものを作ってほしいです。民放はスポンサーがお金を出していますから、視聴率が悪ければ、演出家からテレビ局をはじめとして役者に至るまで、スポンサーからそっぽ向かれます。視聴率ってやっぱり怪物だと思います。視聴率に左右されない場で働きたいと、俳優はみんなそう思っています。

——それだけ良いものを表現したいということですね。

こう作ったらお客さんにウケるだろうと思っただけじゃないと昔の人はよく言いました。芸術家もね、黒澤明監督も含めて。こういうものを作りたい、見てくれるお客さんだけ見てくれという態度でいくわけです。



でも意外にお客って非情であるし、利口であるし、それでいて無常で、切り捨てるものはすぐ切り捨てますから(笑)。

60年もやっていれば色々あります。三波春夫さん^{※3}は「お客様は神様です」と言ったが、その分だけ、飽きっぽく熱中

しやすい。それがお客というものです。だから捨てられないように頑張るわけです。視聴率も、去年までは良くても、今年はポイントと切って落とされるということもあります。そういう面で、視聴率にあまり左右されない、作り手がこういうものを作りたいというものであってほしいです。

もの作りっていうのは、作家にしても役者にしても自由に表現したいと思う気持ちが必要です。例えば、視聴率が悪いからと言って、閉ざされてしまうと、文化の面において非常に危険です。

NHKは公共放送のままだよ

——視聴率という点から見て、仲代さんはNHKの存在意義をどう見えていますか。

NHKはせめてね、視聴率は気にすることはないと思います。国営テレビにして国が金を出せば視聴率に左右されないのではないかと、そうではないですね。国営になれば規制が色々出てきます。外国の例をみても、かつての日本を見ても自由な表現ができない。NHKは、政治に関しても、民放も最近はそのですが、広い視野で政治を眺めるようになりましたけど。

——受信料についても様々な議論がされています。

規制を受けないという意味で、受信料を払うのは当然だと思えます。放送文化なり演劇文化というものは、国からの圧力とか規制とかなしで、自由にやっていかなければいけないものです。それが何らかの形で、国営にならないにしても、スポンサーの意見とかスポンサーに規制されたら、作り手にとって非常に不自由なものです。やはり、自由にお客のために、お客が今どういうものを見たいのかを考え

※3 「三波春夫」
1923年生まれ。新潟県長岡市出身の歌手。常に朗らかな笑顔を絶やさず、ファンへのサービス精神も旺盛で「お客様は神様です」とのフレーズが有名。日本万国博覧会(1970年/大阪府吹田市)のテーマ曲「世界の国からこんにちは」を歌った。また、NHKの『紅白歌合戦』にも合計31回出場している。2001年7歳で死去。

て作るべきです。ただ、それが視聴率に関係すると困るのですが。確かに視聴率が良い方がいいですけども、視聴率が良いからといって良いものとは限らない。視聴率が悪くたって、良いものは良い。その辺が非常に難しい問題ですね。

NHKは公共放送であって、国営放送になつては困るので、公共放送のままがいいのです。今のままでいいんですけど、あまり視聴率に踊らされず、これからも良い番組を作つていつてもらいたいですね。

文化の主流として真実を伝え続ける

——仲代さんは「放送は文化の主流」というメッセージを書いてくださいました。最近は放送以外にも様々なメディアが出てきています。これからに向けて、放送、そしてNHKには、どんなことを期待していますか。

今は携帯とか簡単に使えるようになりましたけど、やっぱりよく分からない、古い人間ですから(笑)。感覚だけものを言わせてもらえば、情報過多ですね。これ正しいかな？と思う情報がブログに出ていて、恐ろしい感じがします。そういうことが、放送文化に携わっている方々がどう思っているのか、これからの放送を担う若い作り手たちがどう思っているか、非常に興味があります。

我々は芝居で若手を育てていますが、これからの演劇はどうなっていくのか、常に危機感と緊張感を持ちながら育てています。放送界においてもこれからどうしていくのか。それには色々な知恵があるのでしようけど。

ただ、テレビの影響力はとても強いし、常に文化の主流をなしてきたわけだし、視聴率という規制もあるけれど、それを払いのけて、自由なものづくりを若い人たちはして

もらいたいと思います。

ドキュメンタリーにしても、戦争が起きているところに行つて、なぜこの地区は戦争が起きたのだと、徹底的にテレビを通じて、見て下さる方々に真実を伝えてもらいたいですね。演劇なんて小さい文化は、多少うまくいなくても、芝居が不成功に終わつても、ああ料金損したなあと、お客さんに帰られる位ですが、政治が失敗したら戦争になりますから。一番苦しむのは庶民ですよ。メディアは絶対に戦争を起こさないということを徹底してほしいですね。私は戦争体験者ですけど、戦争が起きたら本当にどうしようもないです。私はNHKのドキュメンタリーを見ますけど、ずいぶん食い込んでいると思います。その姿勢を崩さないでほしいです。

仲代さんもおっしゃっていましたが、視聴率をどう番組作りに反映させるか、というのは大変難しい問題だと考えさせられました。視聴率だけを追い求めてはいけないし、かといって視聴率を軽視することはできない。「お客」である視聴者に媚びるのではなく、良いものを作り出していきたいという思いがまず原点であるという仲代さんのお話しに、番組作りの出発点について深く考えさせられました。

仲代さんご自身は、能登での公演をとっても大切にしているらしいです。効率を考えれば、能登という場所は、東京などの大都市に比べ、決して交通の便が良いわけではありません。それでも良い舞台を見てもらいたい、という仲代さんの情熱が、能登での舞台を可能にし、地元の人たちを突き動かし、多くの人の心を打っています。

これまでになく、NHKでも地域放送局の果たすべき役割、求められる期待は大きいものになっています。それぞれの地域の強みや魅力に率直に向き合い、「良い放送」を発信していくことが、「放送」が「文化の主流」たる原点なのだと感じました。

報告 中部支部金沢分会 金城均